

幼児教育寸描

各地の短信から

—研究したいこと—

—困っている問題—

—感想・反省—

幼おきな児こととも

加藤邦子

「せんせ、お早よう」「あーらお早ようTちゃん」「せんせ、これ
やっから」「まあきれいな！ Tちゃんのおうちに咲いたの」「せん
せつ、おはよう」「はいおはよう」「せんせー、おはようってば」
「あら、Hちゃん早くお靴ぬぎなさい。きれいでしよう、こんな大き
なドリヤね、Tちゃんもつけてきてくれたのよ」「おらいいだつてあ
るーっ。もっと大きいのあるよ」Hは口をとんがらして花瓶をもち
にゆく私の後を追ってくる。「いやだあ、わたしだよ」「ちがうよ
私がかこだったんだよ」「先生、Hちゃんつねるのーっ」「ざあざ
あおりこうさんは一二の三で離れましょうね。一二の三」前から後
からスカートにしがみついていた子どもたちが一斉にはなれたが、
Hだけが手をはなさない。「あらHちゃん、おりこうさんでしょう、
お花がおれるからね」そういうとなおのことしがみついでくる。二
学期が始って半月、幼児たちは入園当時よりもずっと個性がはつき
りしてきて、各々に成長した姿である。じっくり構えて個人研究を
してみなければと思っていたMも、いつのまにかその横暴さを消し、
落ち着いてきた。呼んでも返事のできなかったAも、キャッキヤッと
ふざけまわるほどになった。かけ出しの私にとっては、その日一日
を暮すのがせい一ぱい。頭をしぼり、先輩の先生方におききなが
ら立てたカリキュラムにしたがって、保育が終ったあとの時間

は、日誌をつけ、次の日の準備をし終らないうちに五時になってしまふ。あつという間に一週間がすぎ、とうとう一学期を過ぎてしまった。この間子どもたちの問題をみつめて、どうにかしなくては、と思つているうちに彼らはどんどん変化していつてしまふ。一学期に二、三回私はHの家を訪問した。彼女の横暴さはじつに驚くほどであつた。ちよつと自分の氣にいらぬ事態になると、誰であろうとける、つねる、叩く、ついに手足をばたつかせて大声を出してあばれる。家族の方が「口でいってつたつて絶対かかねかんね」といいながら、私さえ怖くなるほどの声で叱りつけ、叩きつける。子どもの思いがおとなのそれを中心に判断されてひどくきびしくしつけられている。そのおとなの思ひも、この家の複雑な事情と深く結びついているようだ。父母は現在いなく、祖母がHとHの姉を育てていて、近所でも、生活上の問題や、今までの家庭事情から特別な目で見ても、普通な目にとりあつかつていないらしい。家族ひとりひとりの間も、近所の人々との間も、つつけば苦い水の出そうな關係だ。私は母の会合のとき、できるかぎりの対策を、そのおばあちゃんと協力してやつてみることに約束した。しかし長い間の習慣は容易に消えない。いくら幼稚園で氣を配つても、この人的条件が変えられるわけもなく、そこから生ずる精神的経済的不安定や不満は、家族ひとりひとりにゆがみを引き起させている。しかし他をおしのけてもしてみつこうとするHの意欲にはたじたとするが、その真剣な瞳の色は、何かを求め訴えている。私の手で、この何もできない手でも、心からできるだけのことをしてあげなくては、と思ふ。現在のままで彼女の将来を思ふことは暗胆たる氣持である。ああ何とかくして、あのつぶらな瞳が、夢にもえて生々と輝くように。「教育」だけでは

解決できないけれども、その限界の中で、あの家族とともに苦しみ、ともに望みを見出しつつ、私は最善を尽したいと思ふ。

(幼稚園教諭・仙台)

早く字を覚える子どもを

どのように理解するか

長崎 祐子

「先生、まだ字を教えずによろしいのでしょうか。お隣の○○ちゃんは本などをとんどん一人で読みになるそうでございますが——」

「うちの子どもは、もう全部ひらがなを読みます。私ども別に教へませんが、どこからか覚えてまいりました」

面接のおりなどに、たびたびこのような話がでる。幼くして字を読めれば読めるほど、頭がよいと思つている母親がすくなくない。

つまり、字を読み始めた時期の早い遅いによつて知能の程度をはかろうとしているようである。そのたびに「ふつう、心理学者は精神年齢が六歳六ヶ月にならなければ完全に読書の準備ができてるとはいえない、といつております。お子さんは精神年齢はもうそれ以上ですが、体力はなんといいつてもまだ四才児ですから、視力や神経系統の発達から考えると、むしろ字を教えることより、そのための基礎を作るといふお心づかいの方が必要と思ひますけれど」と読書のレイディネスについてもつて知っている知識を受け売りするのが常であつ